

## 大和物語の構成と表現

渡辺 輝道

大和物語の構成を第一部（本篇）と第二部（昔物語）とから成るとする考えに、諸説異論はない。そして、第一部は「寛平——天曆の事柄が多く、和歌中心であるのに対し」第二部は「伝説的で」第一部より「古い年代のものが扱われ、散文中心といった差異がある」<sup>(1)</sup>という捉え方も、おおかたの認めるところである。

しかしながら、第二部をどこからとする認定には、いまだ定説はない。一四一段からとするものと、一四七段からとする説とに大抵は分かれる。<sup>(2)</sup>一四一段からを第二部とする説は、一四〇段までの登場人物が実在人物として確定できるのに対して、一四一、一四二段の登場人物が実在の人物として特定できないこと、また、一四一段は「いつの事とも知れぬ昔物語の体の、これまでの諸段中最長文にわたる説話章段である。その意味で前段との間に落差があり、変貌

の観があるので、本段以下を本物語第二部と見る」<sup>(3)</sup>といった根拠による。さらには、一四二段末が「この歌どもみなふる事になりたることどもなり」（勝命本）、また、一四三段が「むかし」ではじまり「今はみな古ごとになりたることなり」で結ばれている、昔語りとしてそれまでの各話と一線を画した記述が見られることも、有力な根拠になっているよう。

大和物語各章段の内容、主題の分析から、一四一段からを第二部とされる高橋正治氏は、第一部全体の主題を「古今集時代から後撰集時代にわたる人間像のさまざまな様相」、その主調として「憂き世のあはれ」と総括され、第二部の主題を「昔の純愛に生きる人間の清純な姿」とまとめられる。<sup>(4)</sup>そして、一四一段の主題については、「以後の諸段が純粹なものを主題にしているので」、「本妻の（純白な）心根」を中心に読むべきだとされ、諸説が浮気な筑紫の女を中心に読むのを排除される。<sup>(5)</sup>それに対して、柿本氏は、一四一段の

主題は「淡いえにしに泣く女」であり「前段と断絶はしてい」ないといわれる。結局、両氏が一四一段からを第二部とされる根拠の第一は、登場人物の实在性が証明されないことにあると考えてよいだろう。

一方、一四六段までを第一部とする立場は、次のような考えによるとまとめられよう。まず、その实在性は証明不能であっても、「よいし」といひける宰相のはらから」（一四一段）、「故御息所の御姉」（一四二段）といった固有名詞表示によって、話の時の設定と内容の事実性の保証の根拠を示そうとする第一部の発想、方法は、一四六段まで維持されており、一四七段以降の主力が「むかし」の「をとこ、をんな」の物語として異質な発想の語りの姿勢で展開されていくこととの断絶は、一四一段とその前段までのそれよりも深いと考える。また、一四一、一四二段は人物の経歴不明で年次を確定する手がかりがなく、一四三、一四四段が「むかし」と規定されてはいても、在原滋春の生存時の推定から、一四五、一四六段の「亭子の帝」在位期間と遠く離れた年次ではありえず、結局、一四一～一四四段は一四五、一四六段と共に「亭子の帝」の在位期間、即ち「寛平」期を意識しての扱いではなかったかと推定しておくことができるのではないか。それに対して、一四七段以降は（拾遺増補と考えられる一七〇段以降を除いて）、「むかし」の物語であるか、登場人物名が出て来ても、総て「寛平」期をかなり遡る時代のものである。さらには、一四五、一四六段は、以降の諸段との連接

を考えてのものでなく、物語冒頭の「一、二段の「亭子の帝」を意識しての、第一部の結びを示す意味をもつと考える方が妥当ではないか」といった点に集約されると考える。

大和物語の第二部をどこからと確定することについては、端的には、一四三段が在原滋春の話を「むかし」と規定し、「今はみな古ごとになりたることなり」と述べながら、一方では、その父親である在原業平章段（一六〇～一六六段）では、「むかし、をとこ」とする伊勢物語の存在を知りながら、「むかし」とも「古ごと」とも述べないことについて、いまだ確答を得ない段階では、問題保留ということに落ち着かざるをえない。本稿では、第二部を一四一段からとすることに異論はあるが、一四七段からとすることに異論はないことになるという消極的処理法によって、以下の考察を進めていくことにする。

## 二

この第一部、第二部の構成論に対して、国語学の成果は、別の視点からの問題を提起した。

大野晋氏は大和物語中の係助詞「こそ」の用法を基にして、九九段までは歌の中でのみ用いられるが、一〇〇段以降は地の文で用いられるようになっていくことから、そこに語法上の断層があることを指摘された<sup>(6)</sup>。また、辛島稔子氏は、形容詞ウ音便の用例の分布を

基に、一〇二段と一〇三段とを境に前半後半に分けられることを指摘された。<sup>(7)</sup>さらに、小山敦子氏は、「ときに」「こたふ」「たぶ」が蜻蛉日記時代を境にして、「に」「いらふ」「たまふ」に交替していく事実を基に、大和物語では、「たぶ」は十四一段以降、「ときに」は一〇三段以降に用例がみられることから、一〇三段から後半とする考えを出されたのである。

しかし、高橋正治氏は「一〇二段、一〇三段の切れ目は内容的な説明がつかない」とされ、大野氏が後半の方が新しいとされることと、小山氏が後半の方に古いものが使われているとされていることとに、国語学的方法を用いて結果が矛盾したものとして出ていることから、疑義を残していられるようである。しかし、小山氏は前半と後半とが「異なる主体の手になる異なる位相の言語によって記された」と指摘されているのであって、大野氏、辛島氏の論と必ずしも矛盾、対立する説ではないのである。

すなわち、係助詞「こそ」の用法の変化、形容詞のウ音便化、さらに、「ときに」「こたふ」「たぶ」が「に」「いらふ」「たまふ」に交替するといった言語事象の変化は、いずれも一〇世紀の現象であり、大和物語の資料となった歌がたりの多くが、一〇世紀のものである以上、それらの言語事象が整然と使い分けられるというより、混在して用いられる可能性は多分にあるのである。後で詳述することになるが、一〇〇段前後より前は、歌を中心に据えた歌がたりが主流であったため、歌の詞書のような短い、安定した文体で綴ら

れ、それより後は、時に歌よりも物語に重点がある説話的な歌がたりが多くなるため、新旧の語彙、語法が混在する文体になったというような説明が可能であると考える。

また、言語主体が異なることは、内容的に断絶が生じることにほならない。大和物語の作者（编者といふべきか）がそれまでの内容の展開との整合性に配慮し、それに続くように話を配列していけば、内容的な連続性は維持されるのである。ただ、言語主体が異なると内容的な同質性は保持できても、表現上の個性はおのずから顕れ、話の作り様にも変化が見られるようになる可能性は、十分ありうることである。

大野氏ら三氏の成果を承けて、高柳怜子氏は使用語彙の調査結果から、一〇二二段を第一部、一〇三―一四四段を第二部、一四五―一六九段を第三部、一七〇―一七三段を多元的付加章段として、付加章段を除いて、大和物語の三段階成立説を出された。<sup>(10)</sup>

しかし、これに対しては迫徹朗氏は「大和物語へ伊勢物語の三元成立説を導入することは無理であり、また援用された国語学的方法も文体論の決め手となるまでには成長していないので、現段階において、高柳説を支持する向きはなく（後略）」<sup>(11)</sup>と否定的立場をとられる。

大野氏らの説は成立論にかかわるもので、作品の内容、主題を柱にして論ずべき構成論とは異なる次元のものであるが、表現論の視点から見ると、大野氏らの諸説はきわめて示唆に富むもので、それ

に基づいて大和物語を再考する必要があるであろうである。

### 三

まず、「異なる言語主体」をどのように考えればよいのか。

柿本氏は一〇一段について、

本段後半は歌物語から離れて説話になると言えようが、前半も細部の叙述がこれまでの諸段に見られない程豊富であつて、後半と調和を保ち、歌は話の中に点出した形になっていて、本物語を初めから読み進んで来て初めて出会う別趣の傾向である。(傍点

は稿者)

と述べられる。<sup>(12)</sup> 傍点部の感想は大和物語を通していく者が等しく

抱くものであつて、その理由も柿本氏は的確に指摘していただける。

歌物語にあっては、あくまで歌が主役であつて、物語部はその歌に収斂していくものとして語られるのが基本形式である。一〇一段はその主客が転倒しており、そのあり様を柿本氏は「説話」とされるのである。少なくとも一〇〇段までにこのような内容、叙述法をとる章段はないのである。この一〇一段の同話は「宇治拾遺物語」にあり、また、一〇〇段と併せた話が「古本説話集」に収められていることは注目されるところで、それ以前の章段で説話集との関連を有するのは、平中を主人公とする六四段ぐらいしか指摘できない。

その点で今昔物語卷三〇と大和物語との関連はさらに注目される

のである。今昔卷三〇は一四話から成るが、その中七話が大和と同話なのである。

平定文に会ひたる女、出家する語 第二(大和 一〇三段)

近江守の娘、淨藏大徳と通ずる語 第三(大和 一〇五段)

身貧しき男の去りし妻、摂津守の妻と成る語 第五(大和 一四

八段)

大納言の娘、内舎人に取らるる語 第八(大和 一五五段)

信濃国の娘、棄山(山)の語 第九(大和 一五六段)

下野国に住みて妻を去り、後に返り棲む語 第十(大和 一五七段)

丹波国に住む者の妻、和歌を読む語 第十二(大和 一五八段)

各話の内容を対比すると今昔物語が大和物語を資料としたとは言いがたい。しかし、その順序が同じであることから、両者が同一資料と言えるものから、それぞれ収載した可能性は高い。また、大和物語について言えば、それらが一〇三段以降に集中していることが注目される。

ここにおいて一つの仮説が許されるのではないかと思う。すなわち、大和の一〇〇段以降はそれ以前の依った資料とは別種の資料——しかも、発想、表現において説話的傾向を強くもった——によってまとめられたのではないかということである。

この点を作品内部において点検してみる。大和物語で一四六段までに四章段以上に登場し、和歌四首以上を残す人物を主要登場人物



と見て、作品中にどのように登場するかを見る。

(人名の上は登録歌数、下の数字は登場段数、( )内の数字は、上が一〇九九段、下が一〇〇一四六段の登場章段数を示す。)

八首 兼盛 5 (5, 0) 監命婦 9 (9, 0) とし子 10 (8,

2)

七首 宗子 7 (7, 0) 兼輔 9 (7, 2)

六首 元良 6 (1, 5) 公平三女 4 (0, 4) 平中 4 (2,

2)

五首 右近 5 (5, 0) 亭子院 18 (16, 2)

四首 敦忠 4 (4, 0) 桂皇女 7 (5, 2) 忠平 6 (4, 2)

能子 9 (6, 3)

一〇九九段(以下 第1部と呼ぶ)のみに登場する人物は、

兼盛 監命婦 宗子 右近 敦忠

であり、これに、一三五、一三六段に登場するがそれは歌主としてでない兼輔、それに一四五、一四六段の登場が特殊なものと考えられる亭子院を加えた七名が第1部のみの登場人物といえよう。

一方、一〇〇一四六段(以下 第2部と呼ぶ)のみに登場する人物としては、公平三女があり、それに九〇段で歌を贈られる相手としてのみ登場する元良もこれに加える。第1部、第2部共に登場し、歌も詠む人物は、とし子、平中、忠平、桂皇女、能子の五名である。

主要登場人物がこのように第1部、もしくは第2部に片寄って現

われるということは、それぞれの依った資料の異なりを想定する根拠になりうると思う。片桐洋一氏は大和物語の作者として何人かの語り手を想定し、その中心に能子を推定されたが、能子が第1部、第2部に共通して出て来ることを考え併せると興味深い。さらに、能子が最後の夫とした実頼が四章段に登場して(歌は二首)、第1部(96-98段)第2部(120段)第2部(以下 第3部と呼ぶ(170段)いずれにも登場する例外的人物となっていることも注目されるが、作者論に深入りするのは本旨ではない。ただ、いま一つ付け加えておくと、醍醐帝は実質的には八章段に登場する(歌一首、134段)が、第1部で二章段に、第2部で六章段に登場する。このことから敢えていえば、第1部は亭子院を中心とした人々の歌がたり資料が用いられ、第2部は醍醐帝を中心にそれをめぐる人々の歌がたり資料によって話が展開していると言えようか(このことを正確に考えるには、鍵となる人物——例えば、公平三女、とし子などの経歴が不詳であるといった障害があつて、極めて曖昧な推測以上は不可能である)。そして、その二つの歌がたり資料を担った人々の間に言語位相差があり、特に第2部の歌がたりの語り手(単数とは限らない)に、説話的といえる語りに傾斜する資質があつたと推測することによって「異なる言語主体」を説明すべきではないかと考える。そこで本稿は、一〇九九段を第1部、一〇〇一四六段を第2部、一四七段以降を第3部として、以下の考察を進める。

歌がたり、歌物語では物語と同じように、各文末は伝承性を示す助動詞「けり」で終るのが一般である。「けり」止め文末の比率は、山口仲美氏の調査によれば、伊勢物語、平中物語が各六〇％強であるのに対し、大和物語は七〇％強の数値を示し、大和物語の「語り」性の強さが窺われるのであるが、山口氏は「けり」止め以外の文末表現、現在形のあり様に注目して、三作品の特質を次のように結論づけられた。<sup>(14)</sup>

伊勢物語の作者は、歌を内面的にもりあげるために、現在形を用いる。ということとは、作者が、歌そのものに最大の関心をもっていたということであろう。平中物語の作者は、伊勢物語とは違って、歌そのものを鑑賞し、理解し、感じる心をもたなかった。ある歌を、ある女に贈ったら、返事をしてきた。あるいは返事がなかったなどという歌の贈答の行為そのものに関心を示した。表面的なのである。一方、大和物語の作者は、伊勢・平中と違って、歌よりも事件そのものの経過により多くの興味関心をもっていた。事件の核心にふれると、もはや歌のことは忘れ、緊迫した現在形文末で、事件の成り行きを語ってしまうのである。説話的ともいわれる所以であらう。

山口氏は作品全体の語彙、語法の調査から、右のような大和物語の

特質を導き出されたのだが、既に考察してきたように大和物語に表現的特性からの3部構成が指摘できるとすれば、その視点からのこの問題を再点検する必要がある。

小田切文洋氏は、次のような調査によって、第一部と第二部との表現方法の相違とその意味を考えていられる。

△地の文における文末の終止法▽

	一 一四六段	(1)「けり」止め の文末	(2)「けり」止め 以外の文末	合計	総文数に対する (2)の比率
一四七～一七三段	230	394	111	341	32.6 %
				477	17.4 %

「第二部にすすむにしたがって「けり」叙述からの脱却が目立つようになる。それは作り物語化への傾向とつながっているものである<sup>(15)</sup>」と述べられた。

小田切氏は第一部、第二部という立場で「けり」止め以外の文末表現について考えられたのであるが、これを第1部、第2部、第3部とに分けて適用すると、次のようになる。<sup>(16)</sup>

	一 九九段	(1)「けり」止め の文末	(2)「けり」止め 以外の文末	合計	総文数に対する (2)の比率
一〇〇～一四六段	187	208	105	259	29.8 %
一四七～一七三段	233	338	105	259	29.8 %
				235	10.7 %

右の表に見られるように、「けり」止め以外の文末（主に現在形）は第2部から激増しているのである。具体例として前にも触れた一〇一段を見てみる。

おなじ少将、病にいたうわづらひて、すこしおこたりて内にまゐりたりけり。近江の守公忠の君、掃部の助にて藏人なりけるころなりけり。その掃部の助にあひていひけるやう、「みだり心地はまだおこたりはてねど、いとむつかしう心もとなくはべればなむまゐりつる。のちは知らねど、かくまで待ること。まかりいでて、あさてばかりまゐり来む。よきに奉したまへ」などいひおきてまかだめ。三日ばかりありて、少将のもとより文をなむおこせたりけるを見れば、

くやしうぞのちにあはむと契りける今日をかぎりといはましも  
のを

とのみ書きたり。いとあさましくて、涙をこぼして使に問ふ「いかがものしたまふ」と問へば、使も、「いと弱くなりたまひにたり」といひて泣くを聞くに、さらにえ聞えず。「みづからただいままゐりて」といひて、里に車をとりによりて待つほど、いと心もとなし。近衛の御門にいでたちて、待ちつけて乗りてはせゆく。五条にぞ少将の家あるにいきつて見れば、いといみじうさわぎののしりて、門さしつ。死ぬるなりけり。消しいひ入るれど、なにのかひなし。いみじう悲しくて、泣く泣くかへりにけり。かくてありけることを、かむのくだり奏しければ、帝もかぎりなく

あはれがりたまひける。

一〇一段の場合、さらに顕著な特徴は、その現在形が歌の前に一例あるが、他の七例はすべて歌の後の話に集中しているということである。歌がたり、歌物語が歌の詠まれたいきさつを語ることによって生まれたことを考えれば、一〇一段の場合は、歌が主役であることが忘れられ、事件のいきさつを語ることに語り手の関心が移ってしまっていることを端的に示している。そしてこのことは、一〇一段以後の現在形が多く用いられている各章段（第3部も含めて）全般についていえる傾向なのである。これを物語化と呼ぶならば、大和物語では一〇一段以降、物語化が急激に進んでいるといつてよいであらう。

また、いわゆる歴史的現在法は、章段中に現在形が一例だけ出てくる場合は、どれだけ意図的な使用であるか、すなわち歴史的現在法であるかを認定することは難しい。そこで、一章段に二例以上見られる、意図的な現在法使用と考えられるものを、第1部、第2部から拾い出すと、第1部には四章段（2、4、35、64段）、第2部には八章段（101、103、105、125、133、141、145、146段）あり、それぞれの総章段数に比較すると、第2部に格段に多いといつてよいであらう。そして、第1部では、歌の成立にかかわって、歌の前に用いられており、歌がたり、歌物語の本質から逸脱するものではなかった。

歌がたり、歌物語は一首の歌ないしは一組の贈答歌を中心にして、その成立背景を語るといふ形式で作られる話であるから、場面面で構成されるのが本来の形である。伊勢物語の場合、一二五段の約八五割が一場面構成である。三首以上の和歌をもつ長大な形の話も、「一首あるいは一贈答を中心とした一場面をただ並列的に連ねただけ」といふ場合が多い。<sup>(17)</sup>といわれる。

大和物語では一章段が二場面以上から成ると認められる章段は、第1部では一四章段、第2部では一六章段を少なくとも指摘できる。そして、それらの章段では、場面展開が「かくて」といふ接続詞によってなされていることが表現上の特色になっている。

第1部の一四章段中「かくて」が場面展開に用いられているのは七章段、第2部では一六章段中一一章段を数えられる。第1部での多場面話の数は、伊勢物語のそれとほぼ同率といえるが、第2部でのそれは、二倍以上の率を示している。そして、場面と場面との接続部には「かくて」といふ展開<sup>(18)</sup>連接を示す接続詞が用いられるといふ表現構造を基本の形にしているといえる。

これもおなじみに、おなじ男、

長き夜をあかしの浦に焼く塩のけぶりは空に立ちやのぼらむ  
かくて、しのびつつあひたまひけるほどに、院に八月十五夜せら

れるに、「まゐりたまへ」とありければ、まゐりたまふに、院にてはあふまじければ、「せめて今宵はなまゐりたまひそ」ととどめけり。されど召しなりければ、えとどまらで、急ぎまゐりたまひければ、嘉種、

竹取<sup>たかとり</sup>がよに泣きつとどめけむ君は君にと今宵しもゆく。

(七七段)

『竹取物語』の成立時を考えるときに根拠にされる有名な話である。ここでは「地の文 + 歌 + かくて + 地の文 + 歌」という典型的な形になっていて、二話に分割しても成立する話なのだが、同一人物による同一主題ということから「かくて」で一話にまとめられたと考えられる。その結果、嘉種の内親王に対する想いは時間的持続性を与えられ増幅されて、話はよりドラマ性を強めるという効果もたらされることになった。

しかし、次の場合は同じ「かくて」で展開される話だが、少し様子が違ったものになっている。

亭子の帝の御ともに、おほきおとど、大井に仕うまつりたまへるに、紅葉、小倉の山にいろいろとおもしろかりけるを、かぎりなくめでたまひて、「行幸<sup>みゆき</sup>もあらむに、いと興ある所になむありける。かならず奏してせさせたまつらむ」など申したまひて、ついでに、

小倉山峰のみみぢ葉心あらばいまひとたびのみゆき待たなむ  
となむありける。

かくてかへりたまうて奏したまひければ、「いと興あることなり」とてなむ、大井の行幸といふことはじめたまひける。(九九段)

右の場合、歌がたりとしては「となむありける。」で終わっているのだが、その結末としての後日譚を「かくて」以下で語るといふ形になっている。貞信公忠平の名歌がどんな結果を招来したか、聞き手の関心に応えるように後日譚を付加したのである。その結果、大井河行幸の起源譚とも読める話になって、本来の忠平歌成立の背景を語る話の影が薄くなることになった。「かくて」による話の展開的連接は、歌がたりの本質を崩しかねない力を持つことを示しているといえようか。

伊勢物語には三例しか用いられなかった「かくて」が大和物語の第1部に九例、第2部に一八例(うち二例は副詞用法)、計二七例数えられる。

第1部では、その多くは七七段のような歌がたりと歌がたりとを結合する接結語として用いられているのだが、一首の歌ないし一組の贈答歌を対象にして生まれた、したがって、一場面性を本来の形とする歌がたり、歌物語が、主人公が同一人物であるとか主題が同じであるとかの理由であるにせよ、結合されるといふことは、そこに話の展開(「また」ではなく「かくて」が用いられることが象徴的である)といった物語化の方向をおのずから胚胎することになる。伊勢物語に三例しか見られないことは、歌物語の本性に忠実であったことを示すものといえよう。伊勢物語で「かくて」によって

二場面が結合されているのは、五九段だけである。

九九段の場合は、歌がたりと歌がたりとを結合させるものとして用いられた「かくて」が、本来の展開性を自立させて、歌を忘れたかたりだけの後日譚を引き出した例で、そこには脱「歌がたり」の方向が読みとれるのである、九九段以前にはこのような後日譚をもつ章段は認められない。九九段の位置にこうした例が見られるのは、決して偶然ではないと思われる。九六段が「かくて」ではまる大和物語の特異な章段であったことも、第1部終末にきて歌がたりのあり様が変化しつつあることを示していると考えさせるのである。こうした第1部内での歌がたりの変容が、第2部に説話性の高い他の歌がたり資料を招来、選択させる要因になったのではないかと考えられる。

第2部からは、脱「歌がたり」と呼ぶ方が相応しい長い内容の章段が現われはじめる。そこでは「かくて」は話の必要に応じて自在に用いられるようになる。

## 六

脱「歌がたり」傾向とは、かたられる話から書く物語へと変質していくことを意味するようである。

おほきおとは、大臣(おと)になりたまひて年ごろおはするに、枇杷の大臣はえなりたまはでありわたりけるを、つひに大臣になりた

まひにける御よろこびに、おほきおとど梅を折りかざしたまひて、おそくとくつひに咲きける梅の花が植ゑおきし種にかあるらむ

とありけり。その日のことどもを歌など書きて、齋宮に奉りたまふとて、三条の右の大殿の女御、やがてこれに書きつけたまひける。

いかでかく年きりもせぬ種もがな荒れゆく庭のかげと頼まむとありけり。御返し、齋宮よりありけり。忘れにけり。

かくて、願ひたまひけるかひありて、左の大臣の中納言わたりすみたまひければ、種みな広ごりたまひて、かげおほくなりけり。さりける時に、齋宮より、

花ざかり春は見に来む年きりもせずといふ種は生ひぬとか聞く

#### (一二〇段)

右の話はもと三つの歌をめぐる別々の三話としてあったものが、一つにまとめられたと考えられる。第一話は、兄より先に大臣になった忠平がずっと遅れて大臣になった兄仲平によるこびの歌を贈った話で、第二話は、第一話のことを齋宮への便りに書いた三条の右大臣の御御が、父右大臣の没後の家運の衰えを歎き訴える話で、第三話は、その後、女御が中納言実頼と結ばれ、多くの子にも恵まれたことを齋宮が祝福している話である。

内容上は第二第三話が中心の話ととれるが、第一話の内容も単なる導入とするには重い。少なくともこのままの形でかたられた可能

性は考えられない話である。「梅の花」「種」という三歌に共通する素材を横糸にして繋いだ話、机上で再編成された話と考えられる。第2部には脱歌がたりと見なしうる話が多く認められるが、物語としての完成度という点からは未熟なもの——歌がたりの原型へのこだわりが強く、そのため一二〇段のような主題分裂といえる話が見られるのである。

第3部の話であるが、大和物語一六一段は、伊勢物語三段と七六段とを合成した形になっている話である。

在中将、二条の後の宮、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人におはしましける世に、よばひたてまつりける時、ひじきといふ物をおこせて、かくなむ

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじき物には袖をしつつもとなむのたまへりける。返しを人なむ忘れにける。

さて、後の宮、春宮の女御と聞えて大原野にまうでたまひけり。御ともに上達部・殿上人、いとおほく仕うまつりけり。在中将も仕うまつれり。御車のあたりに、なま暗きをりに立てりけり。御社にて、おほかたの人々禄たまはりてのちなりけり。御車のしりより、奉れる御単衣の御衣をかげさせたまへりけり。在中将、たまはるるまに、

大原や小塩の山も今日こそは神代のこともおもひいづらめと、しのびやかにいひけり。むかしをおぼしいて、をかしとおぼしける。

#### (大和 一六一段)

むかし、男ありけり。懸想じける女のもとに、ひじき藻といふものをやるとて、

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじき物には袖をしつつも二条の後の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人におはしましける時のことなり。

(伊勢 三段)

むかし、二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうでたまひけるに、近衛府にさぶらひけるおきな、人人の禄たまはるついでに、御車よりたまはりて、よみて奉りける。

大原や小塩の山も今日こそは神代のこともおもひいづらめ

とて、心にもかなしと思ひけむ、いかが思ひけむ、しらずかし。

(伊勢 七六段)

伊勢物語が「思ひあらば」歌を業平歌とするのに対し、大和物語が二条の後の歌とする点が大きく異なる。大和一六〇一～一六六段までの業平説話と伊勢物語との関係について、片桐洋一氏は「おそらくは、伊勢の資料にも大和の資料にもなった別種の業平説話が存在し、伊勢はそれを資料にして物語を膨脹させ、また大和と同じくその資料をもとに一六〇段から一六六段までの業平説話をまとめたのではないか」といわれる。結果として見られる両作品の話を較べてみると、伊勢が二つの話として三段、七六段に収載しているところを見ると、それが原資料の形であったと考えられる。伊勢三段は後入注がなければ、歌の内容からみて、「をとこ」が身分の低い貧しい女に贈った歌と理解するのが自然であるが、大和一六一段が同じ

歌を二条の後の歌としていふことから考えると、その時点での後入注の存在は確かめるすべもないが、何らかの形で、「思ひあらば」

歌は業平と二条の後の間で交された歌として資料にあったのであろう。そして、伊勢三段が「をとこ」の歌として扱っており、また大和が「返しを人なむ忘れにけり」と業平歌がないことに言い訳じみた断りを入れているところを見ると、その歌主は業平であった可能性の方が高いと思われる。しかし、歌の内容からいって、身分の高い方が詠んだ歌とする方が自然で、「権門の子女で后がねと目されていた人に対して業平が言うにはふさわしくない」と考えて、大和物語作者は、合理的に二条の後の歌と改め直したのである。一六一段後半は后の大原野神社参詣の供をした業平が「大原や」歌を詠んだのに対して、「むかしおぼしいでて、をかしとおぼしける」と、後の心情を叙述するところで終る。一方、伊勢七六段は歌の後、「心にもかなしと思ひけむ、いかが思ひけむ、しらずかし」と「をとこ」の心情を推測する叙述で終る。伊勢三、七六段が「をとこ」を主人公にしての話であったのに対し、大和一六一段は「二条の后」を主人公にした話にしているのである。おそらく伊勢と同じ資料に拠りながら、大和はそのままでは伊勢のような不自然な形になることを考え、合理的に改変したのであろう。その結果、新しい主題による創作話を創り出したのである。ただ、冒頭を「二条の後の宮」としないで「在中将」とする点、原話の影響から抜けきれないところを残している。

第3部では第2部よりもさらに進んだ書く物語への成長が認められるのである。

このように見ると、第1部から内在していた大和物語の物語化へのベクトルは、第2部において顕在化し、第3部の長大な物語群はその必然的帰結として位置づけられるのであり、それらは外から持ち込まれた異質な物語世界では決してなかったと理解できるのである。

今日、大和物語の構成論については、第一部、第二部の構成とみることは定説といってよい。それは内容的な面からみる限り妥当性をもつ。しかし、表現論の立場から導き出される第1部、第2部、第3部という視点——これは構成論としての設定ではなく、まして三段階成立論を肯定するものでもない——から『大和物語』を考察してみると、作品の本質の新しい一面を見出すことができるのではないかと考えるのである。

引用した大和物語、伊勢物語の本文は、日本古典文学全集本による。

注(1) 雨海博洋『歌語りと歌物語』（桜楓社 昭和五十一年）

(2) 他に一四五段からとする説もあるが、それについては本稿中で触れる。

(3) 柿本奨『大和物語の注釈と研究』（武蔵野書院 昭和五十六年）

(4) 日本古典文学全集『竹取物語 伊勢物語 平中物語』の大和物語解題（小学館 昭和四十七年）

(5) 『大和物語』（塙書房 昭和三十七年）

(6) 『日本古典文法（十）』（「解釈と鑑賞」 昭和三十三年三月号）

(7) 「伊勢物語の三元的成立の論」（「文学」 昭和三十六年一月月号）

(8) 「うつは俊藤巻に現はれたる語彙の性格」（『宇津保物語 新論』宇津保物語研究会 昭和三十三年）

(9) 注(5)に同じ。

(10) 「大和物語の成立に関する一考察」（お茶の水女子大「国文」二六号）

(11) 「大和物語研究の現段階」（「国語と国文学」五六巻二号）

(12) 注(3)に同じ。

(13) 『鑑賞日本古典文学 伊勢物語 大和物語』（角川書店 昭和五〇年）

(14) 「歌物語における歴史的現在法」（「表現学論考」（今井文男教授還暦記念論集） 昭和五十一年）

(15) 「大和物語の表現方法——第一部と第二部を対比して——」（「日本大学文学部研究報告 第三二集」）

(16) 小田切氏との間に数値誤差があるのは、使用テキストの相違による。



(17) 片桐洋一『伊勢物語の研究(研究篇)』(明治書院 昭和四三年)

四三年)

(18) 塚原鉄雄「連接の論理―接続詞と接続助詞」(『月刊文法』

第二卷第二号)

(19) 注(17)に同じ。

(20) 注(13)に同じ。

# 會員近著紹介

## 『助詞の構文機能研究』

重見 一行 著

著者年来の雑誌発表論文のうち助詞を問題とした論考を基に、改めて編集して一書とされたものが本書である。

本書の構成は

第一章「は」助詞の研究 第二章その他の助詞の研究から成る。これに、「序論にかえて」と「まとめ」、索引が付される。

音数律に束縛される中古韻文資料を避け、また、古語の文法は、現代研究者の「解釈」によるものであるという立場から、文構造にかかわる助詞として、中古助詞「は」を中心にとりあげ、その機能を明らかにするため、格助詞や接続助詞との共通点や相異を論じ、これを明らかにすることが、助詞全体、また、日本語構造全体を明らかにするものだという。また、中古助詞の問題は、本質的に現代語の問題に通ずるものであるとする見通しの上に編まれた書である。

第一章の中古助詞「は」を中心とした論の展開のほか、第二章では、中古助詞「や」の構文的機能、中古助詞「を」の格助詞・接続助詞の問題、接続助詞としての「が」の認定などが採り上げられている。

(一九九四年七月十一日 発行 A5版 二一九頁 八二四〇円 和泉書院)